

## J フーリエ研究の現在

世話人：篠原洋治（慶應義塾大学非常勤講師）

報告者：福島知己（帝京大学）、篠原洋治

討論者：大塚昇三（北海道武蔵女子短期大学）、壽里 竜（慶應義塾大学）

本セッションは、2018年3月に福島知己の呼びかけで、フランスの研究者2名を含め全国のフーリエ研究者が一橋大学に集まり催された「フーリエ研究集会」の成果の一部を、学会員に共有していただく趣旨で開かれた。10名ほどの聴衆を集め、今後のフーリエ研究の方向性を指し示す有意義なものとなった。

以下、報告とコメント、フロアからの質疑応答を示す。

### 第1報告（福島知己）

報告の前半は「フーリエ研究集会」の概要説明、後半はその集会において自身がおこなった発表の説明である。

フーリエ研究集会においては、フーリエ研究国際学会に属するフランス人研究者2名からそれぞれ、フーリエ研究の現在的な広がり、ベンヤミンのフーリエ論の説明がおこなわれた。フーリエ研究に関しては、学術的調査の多様性もさることながら、フーリエに想を受けた絵画、スペクタクル、音楽など芸術的受容の諸相も指摘された。ベンヤミンについては、ファランステールの爆発による伝播という周知のイメージの源泉、意味、可能性が委細にわたり解説された。さらに集会では、結婚の形而上学との関連でフーリエを読解する刺激的な発表、レーモン・クノーのフーリエ論の解説、本セッションに出席した3人のフーリエ研究者（大塚、篠原、福島）の発表に加え、フーリエに想を受けてそれぞれ詩と絵画を構想した詩人と日本画家による驚異的な発表もあった。

報告者自身は、フーリエを社会統合の理論家としてではなく、紛争の理論家と見ている。社会調和というフーリエのキーワードはしばしば統合の側面において理解されてきたが、実際にフーリエが注目しているのは、いたるところでたえまなく紛争が生じているという事実である。フーリエは紛争の調和的解決を志向しているが、その解決は終末論的なものではなく、新たな紛争がいつでも生じうる。紛争を解決するという作業を通じて、調和が再強化されていくのであり、この再強化が調和の本質なのである。

以上の観点から、『産業の新世界』序文の一草稿の分析をおこない、フーリエの理論の核心にあるもののひとつを抽出しようとした。この草稿は『産業と学問の無秩序について』という題名で1847年に弟子たちにより刊行されたが、草稿と比較すると重要な欠落がある。それは自然的平衡錐の理論と「穏和」の理論に関する部分であり、そこでは、文明世界では快樂が少なすぎるために単純快樂が限度を超えて引き延ばされ、さまざまな不幸をもたらしていることと対比して、快樂の頻繁な多様化と絶え間ない連鎖が調和形成に繋がると論じられている。フーリエの理論では、連鎖の実現可能性よりもむしろ、うち続く快樂に堪えうる強靱な身体が理論的前提になっていることが注目される。

討論者の大塚昇三会員は、自然的平衡錐の理論に見られる三角形の構図が社会運動の推移年表やファランステールの設計図などフーリエの著作のいたるところに見られるという報告者の説明にたいして同意を示しつつ、『産業の新世界』などに描かれている上位階級への憎悪の連鎖と下位階級への軽侮の連鎖もまた、そのような三角形の構図の実例であり、フーリエの思想の核心のひとつであることを指摘した。

## 第2報告（篠原洋治）

マンデヴィルが引き起こした「奢侈」論争は、荒ぶる情念のなかで「穏やかな情念」＝「利己心 **interest**」を選びとり、道德哲学の地平から経済学的知の地平へと横滑りしながら、スミスに至って経済学を確立させた（ハーシュマン）。あらゆる情念の解放を訴え、情念引力による社会調和を考えたフーリエ思想は、こうした流れに逆行し、社会秩序と個々人の諸情念との関係を問い直す道德哲学の問題設定に回帰しているかのようだ。欲望が市場を媒介に貨幣獲得へ一元化される市場社会の確立期に、フーリエは、市場に代わる「情念取引所」（ドゥブー）での多様な諸情念の直接的交換による産業秩序の形成を提起した。フーリエによれば、社会調和の実現には、各人が嗜好の洗練を図ることが肝要である。奢侈・嗜好の双方の洗練がなければ産業も活性化しないし、人々の幸福も得られないとフーリエは考えたのである。ところで「洗練」は、「奢侈」同様、18世紀の重要なキー・タームの一つである。洗練をめぐるヒューム思想との比較を通して、フーリエの構想が18世紀の文明論の展開の一つの変種であり、来るべき「調和」とは、商業社会批判を通して構想された、「文明」を超える奢侈と嗜好の洗練を実現する一つのオルタナティブであることが示された。

壽里竜会員からは、「スミスとは区別される労働観をもつヒューム」「奢侈の擁護者としてのヒューム」「男女の交際におけるマナーの洗練を語るヒューム」など、「奢侈」、「洗練」をめぐるヒュームの側面が紹介され、文明論の視点からフーリエとヒュームを比較することの妥当性を補強するコメントとなった。

フローラからは、坂本達哉会員から、フーリエ思想に利己心（情念）の自己規制というモメントがあるのかという質問があがった。フーリエにあっては、情念引力による「社会運動」の規制という考えはあるが、それはむしろ神の摂理として提示されたうえで機械論的に説明され、個人の内面的葛藤としての道徳議論はないことが説明され、イギリスとフランスの道徳論議には、根本的な違いがあることが確認された。平子友長会員からは、穏和と訳された語 *modération* が節度、中庸という古代哲学以来の独特の語義をもつという興味深い指摘があった。また細見和之会員から、フーリエ思想と19世紀初頭の沸騰する思想潮流とのつながりを問う質問があがったが、18世紀のエピステーメのなかで展開されたフーリエ思想と、フーリエ主義者が直面した時代との対決は、別に考えるほかないという回答に留まった。たとえば、性愛が投影された宇宙論を含むフーリエの著作が公刊され、風刺画家グランヴィルによって「惑星間の交接」が挿絵になっていく一方で、男女平等的な考えを暗示する、著作の取るに足らない僅かな部分が、フーリエ主義者によって自己検閲されたりしている。こうしたフーリエ思想の受容分析を通して、むしろ時代の感性を査定できるのでないかという展望をもつことができた。

（文責：篠原、福島）